

薦野増時と米多比鎮久 ~その1~

全国的にはそこまで有名ではないのに、歴史の専門家が選ぶ好きな戦国武将では必ず上位に入る立花宗茂（柳川立花藩祖）。関ヶ原の合戦で敗れて改易（取り潰し）された大名が旧領に復帰した唯一の例と言われる宗茂には、彼を支えた古賀出身の二人の重臣がいました。それが、薦野増時と米多比鎮久です。

1 二人が仕えた、戸次道雪（1513?~1585）と立花宗茂（1567~1642）

豊後国（現大分県）の戦国大名大友氏の一族の出身で、最も勢力のあるとき九州六カ国の守護を兼ねていた大友宗麟（義鎮）を支える重臣であった戸次道雪（鑑連）は、1568年に宗麟に反旗を翻して討たれた立花鑑載（その首なし塚は、川原区三柱神社横）に代わって、1571年、博多を押さえる筑前国の最重要拠点である立花山城の城督（城主は大友宗麟。その代官）になりました。同じく宗麟に反旗を翻して追放された御笠郡の高橋鑑種に代わって、やはり大友一族の吉弘家から、高橋家を継いで宝満城・岩屋城（ともに太宰府市）に入った高橋紹運（鎮種）とともに、1578年の日向国の耳川の合戦で島津勢に大敗し、以降、衰運に向かう大友家を支え続けました。



青柳バス停付近から望む立花山

「戸次道雪」について

道雪は、立花道雪の名前が一般に有名ですが、一次資料では道雪自身が「立花」姓を名乗ったものがなく、大友家から許可が下りなかったようです。後を継いだ宗茂から「立花」姓を正式に名乗りました。

道雪には男子が無く、1568年に再婚した問注所氏（仁志姫＝宝樹院）との間に生まれた7歳の娘の闇千代（1569~1602）に城督を譲りました（1575年）。その婿に望まれたのが紹運の嫡男統虎（後の立花宗茂）で、二人は1581年に結婚しました。統虎15歳、闇千代13歳（いずれも数え年）。

1585年、道雪は筑後の戦陣で病没し、翌年には九州制覇を目指す数万の島津軍を700余りの寡兵で岩屋城で迎え撃った紹運も、半月にわたる戦国史に残る激戦の末に亡くなりました。その結果、大きな被害を出したことから、立花山城を囲んだ島津軍の戦意が低く、豊臣秀吉の援軍が間に合ったことで、島津軍は九州制覇を諦め、博多の町を焼いて退却しました。



岩屋城本丸跡に立つ碑（太宰府市）

ただちに立花山城を出て島津軍を追撃した宗茂は、
 ほし^{ほし}のよし^{よし}ざね^{ざね} よしかね^{かね} たか^{たか}とり^{とり}い^い
 星野吉実・吉兼兄弟が守る高鳥居城（須恵町）を攻め
 だっかん^{だっかん}
 落とし、さらに宝満城・岩屋城も奪還します。

翌1587年、九州を制圧した秀吉は宗茂を「九州の逸
 もつ^{もつ}
 物」と激賞し、筑後柳川で13万石余りを領する独立し
 た大名としました。弟の高橋統増（後に立花姓を名乗
 たか^{たか}はし^{はし}むね^{むね}ます^{ます}
 り、立花直次）も三池郡が与えられ、大名となりました。

宗茂は、文禄・慶長の役でも大活躍しましたが、
 せき^{せき}がはら^{がはら}
 関ヶ原の合戦では敗れた西軍についたために改易され
 ろう^{ろう}にん^{にん}
 て牢人生活を送りました。閻千代とは柳川時代にすで
 に別居しており、改易後は、閻千代は母と、加藤清正
 か^かとう^{とう}きよ^{きよ}まさ^{まさ}
 領の腹赤村（熊本県長洲町）に隠棲し、1602年に亡く
 なくなりました。その後、宗茂は徳川二代将軍秀忠に信任
 ひ^ひで^でただ^{ただ}
 され、1606年、まず五千石の旗本として復権し、やが
 て福島で1万石の大名となり、1620年、とうとう旧領
 はら^{はら}か^か
 であった柳川に、ほぼ同じ約11万石の大名として復
 帰し、幕末まで続く柳川藩の礎^{いしずえ}を築きました。



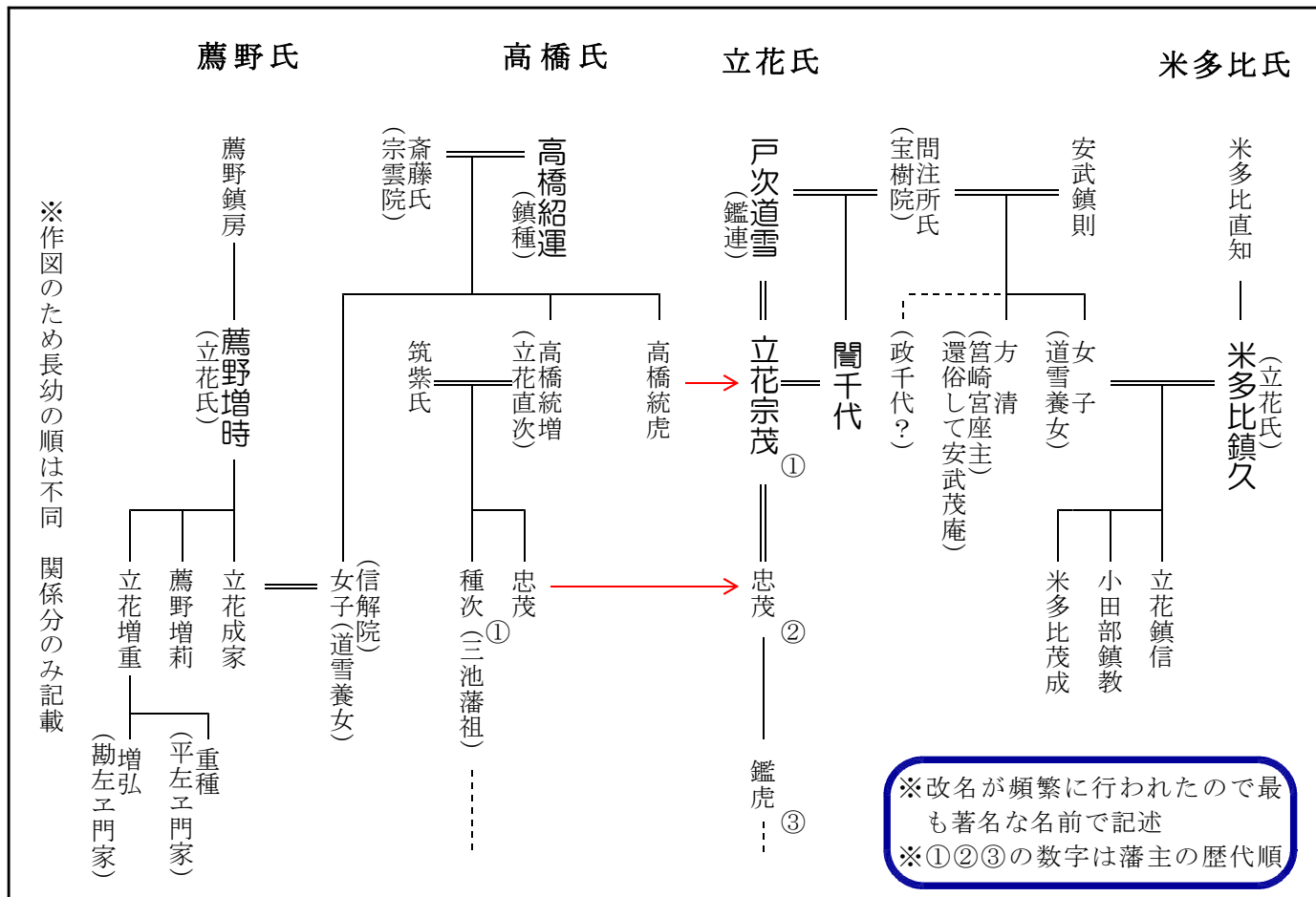
高鳥居城本丸跡の碑（須恵町）



閻千代墓「ばたもちさん」

(熊本県長洲町)

立花氏・高橋氏・薦野氏・米多比氏のつながり



薦野増時と米多比鎮久 ~その2~

2 薦野増時（三河守、立花賢賀）（1543～1623）

薦野氏の本姓は多治比（丹治、丹）氏で、宣化天皇の末裔を称しました。式部少輔峯延の時に薦野に住するようになり、薦野の臼ヶ岳に城（薦野城）を築きました。

戦国期には、地域の小領主（国人）として大友氏に属し、立花氏に与力として付けられました。1568年、立花鑑載が大友義鎮（宗麟）を裏切って毛利氏についたとき、当主の薦野鎮房が鑑載によって立花山城で謀殺されたため、跡を継いだのが息子の増時です。

鑑載に代わって立花山城に入った道雪のもと、各地の合戦で武功をあげるとともに、優れた外交力と冷静な判断力で、道雪の信頼を得ました。道雪によって婿養子に請われますが、大友一族から迎えるように進言して辞退し、代わりに閻千代の婿に高橋紹運の嫡男高橋統虎（後の立花宗茂：以下「宗茂」で記述）を推薦しました。道雪は、宗茂の妹（信解院）を養女にして、増時の嫡男の成家に嫁がせています。

1586年の島津進攻に対するため、宗茂の使者として豊臣秀吉に面会する際に、増時に立花の姓が与えられ、後年は「立花賢賀」を名乗りました。

柳川では、小野鎮幸の五千石に次ぐ四千石を与えられ、柳川城の五つの支城のうち、城島城を預かり、城番を務めました。文禄・慶長の役（1592～1598）の際は、出陣した宗茂に代わって、柳川城の留守居を務めました。

秀吉の死後、天下の情勢を分析して徳川家康につくことを進言しましたが、宗茂の入るところとならず、立花家は改易となり、宗茂主従の多くは加藤清正が預かることになりました。しかし、増時の力量を知る黒田長政から誘いがかかり、成家とともに黒田家に仕えることになりました（1601年）。成家には穂波郡で四千石、増時には父祖の地薦野の代官として六百石が与えられました。

成家の家系は後に断絶しますが、弟の増重の家系からは黒田藩の家老などを輩出し、「黒田」の名字を許された者も多く出ました。

増時の墓は、薦野区の「養徳山」と、生前からの道雪との約束によって、道雪が眠る新宮町の梅岳寺で、道雪と道雪の養母養孝院と並んであります。



薦野増時像（福岡市博多区妙典寺蔵）

3 米多比鎮久（三左衛門、立花鎮久）（1551頃？～1633）

米多比氏は、薦野氏と同じく本姓を多治比（丹治・丹）氏としていますが、系図では、出自は桓武天皇の子葛原親王の末裔としています。しかし薦野氏との同族意識は強かったようです。

米多比を本拠として米多比氏を名乗りますが、戦国期には、豊後の大友氏について一族と、山口の大内氏について一族に分かれていました。大内氏滅亡後は宗像大宮司宗像氏貞に属し、宗像氏と立花氏の境界となる古賀で、同族で対峙しました。

大友系米多比氏で鎮久の父直知は、1568年、立花鑑載によって、薦野鎮房とともに殺害され、あとを鎮久が継ぎました。鎮久の生年は明確にできませんが、大友宗麟の名前「義鎮」から一字「鎮」をもらっていること、合戦の感状の記録、『丹治姓米多比氏略系稿』に、83歳でなくなったと記載されていることから、1551年頃に誕生し、あとを継いだのが17歳頃で、宗茂よりも14、5歳年長と考えられます。

道雪の立花入城後は、宗麟によって薦野増時とともに道雪の与力につけられました。生の松原合戦や穂波郡の潤野原合戦など多くの戦場で活躍しました。また、道雪にその性行が愛され、道雪の後妻（問注所氏＝仁志姫＝宝樹院）の連れ子（＝道雪養女、闇千代の姉）を娶って、三人の男子と三人の女子をもうけました。

宗茂が柳川に入ると、重臣として三千五百石を与えられ、五つの支城の一つ、鷹尾城の城番を任されました。このころ「立花」の姓を許されたようです。文禄・慶長の役（1592～1598年）では宗茂とともに朝鮮に出陣し、宗茂の武名をあげた碧蹄館の戦いでも活躍しました。この朝鮮在陣時に、鎮久は山に入って鉄砲で子どもの虎を仕留めました。宗茂から親虎が必ず来るから用心するように言われたところ、案の定、親虎が来たのを再び鉄砲で仕留めました。そのときに使った鉄砲は「大虎」「小虎」と名付けられ、家宝として伝えられました。

宗茂の改易後、加藤清正に三千石で仕えて、義母である宝樹院と義理の妹にあたる闇千代の面倒を見ました。二代目加藤忠広の時におこったお家騒動「馬方・牛方騒動」に巻き込まれ、証人として江戸に登った後、当時福島にいた宗茂預かりとなり、1620年、宗茂が柳川に再封されると、千石の番頭として再仕しました。

亡くなると、闇千代が葬られた柳川市の良清寺に葬られました。



米多比鎮久肖像(米多比家所蔵)

後方の二丁の火縄銃が、「大虎」「小虎」